すずかちゃんへの想い、初めて気がついたのはいつだったんやろか。
図書館の低い天井を見上げながら、ふとはやてはそんなことを考えた。
最初にこの場所でその姿を見かけたときは、ああ、可愛い子だなあ、となんとなく目で追った程度だったと思う。
ただ、それからしばらくのあいだ、ほんのわずか視界に入っただけのその子のことがなにかにつけて思い出されて、忘れられなくなったのも事実だった。
翌日、もしかしたらまた来ているかも、と朝から図書館に籠ったが、その日は結局会うことはなかった。
それから数日、毎日のように図書館に通って、ようやくもう一度出会えたときには、はっきりと心臓が高鳴ったのを覚えている。
腰の上あたりまで伸びたふわふわの髪、それによく映える真っ白なヘアバンド、本を探しているときの真剣な表情と、見つけたときの嬉しそうな笑顔。
一目惚れ、とまではいかないかもしれない。
でも、あの頃にはもう、自分はすずかちゃんを好きになっていたんじゃないか、と思う。
話したこともない。どこの誰かも、名前すらも知らない少女を、だ。
そしてあの冬の日、高いところの本が取れずに苦労していた私に、すずかちゃんがそっとそれを手に取って渡してくれたとき。
きっと、本格的な恋に落ちたのは、あの瞬間だったんだろう。
それは、私に向けられたすずかちゃんの、一瞬天使かなにかと見間違えたほどの清んだ優しい表情に。
私は、自身の全てを持っていかれてしまったのだ、と。

「……なんて、我ながら詩人やな、うん」
と一人小声でつぶやきながらうなずくはやてに、横からすずかが不思議そうな顔で声をかけた。
「ん？　はやてちゃん、どうかした？」
「な、なんでもない、なんでもないで」
慌てて首を振るはやてに、すずかはそれ以上は特に追求もせず、そう、と微かに笑って、また視線を手元の本に戻す。
はあ、と溜息をつきながら、はやてはすずかに気付かれないように顔をそむけつつ、目だけですずかの横顔を見た。
すずかちゃんは可愛い、と思う。
けして贔屓目ではないという自信がはやてにはあった。
それは見た目の話だけでなく、日々の言動やしぐさ、表情などに現れる内面に到るまで、なにもかも全てが可愛い、愛おしいとはやてには思えた。
女子である自分の目から見てもそうなのだから、男子か

らはもうそれこそ神のような憧れの眼差しを向けられているのではないだろうかと思うが、今のところ誰かがすずかに告白したとかそういう話は聞いたことがない。
まあ、そんな怖いもの知らずは少なくともうちのクラスにはいないかな、とはやては頭の中にアリサの顔を思い浮かべて苦笑した。
「……はやてちゃん？」
その声に気付いたのか、すずかが再び怪訝そうな目をはやてに向けてくる。
「ああ、いや、なんでもないよ」
ごまかそうとするはやてだったが、二回目となるとすずかも即納得というわけにはいかなかったようで、
「もう、はやてちゃんてばどうしたの？」
と脇からはやての顔を覗き込むように、ぐい、と自分の顔を寄せてきた。
「わ、す、すずかちゃん、かお、顔近いって」
はやてが真っ赤になって身体をのけぞらせる。
「変なはやてちゃん」
すずかがひとまず体勢を戻すと、はやてはやれやれと安堵の息を漏らした。
「いやあ、すずかちゃんがあんまり可愛いもんやから、つい見とれてしもうたんよ」
「はやてちゃん、なにかごまかそうとしてる？」
「してへんしてへん。私はいつだって本気やで」
「もう、そこからして疑わしいなあ」
ころころ、とすずかが小さく笑う。
「でも、ふふ、ありがとう」
「え、な、なにが？」
「可愛い、って言ってくれて」
「ああ、う、うん、可愛いよ、すずかちゃんは、私が知ってる限り世界で一番可愛い女の子や」
「もう、そこまでいくとウソっぽいなあ」
本気なんやけどな、という言葉を飲み込んで、はやてはごまかすように苦笑いを浮かべた。
「それに、世界で一番、なんて言ったらアリサちゃんたちに怒られるかもよ？」
少しだけ、いたずらっ子のような顔をして問いかけるすずかに、
「あー、うん、でも、アリサちゃんやフェイトちゃん、なのはちゃんなんかは、たしかに可愛いんやけど、どっちかっていうと私の中ではかっこいいってイメージなんよねえ」
三人の顔を順番に思い浮かべながら、はやてが申し訳なさそうに答える。
「ああ、それはわかるかも。かっこいいよね、みんな」
すずかが納得したようにうんうんとうなずく。
「すずかちゃんだって、かっこいいところもあるで？　体

育のときとか」
「えー、そうかなあ？」
「そうそう。あー、憧れるわ」
「はやてちゃんだって、お仕事のときとかきっとすごくかっこいいんだろうなって思うけど」
「いやー、ないない。私なんてフェイトちゃんのかっこよさの足元にもおよばんて。あれは、なのはちゃんが惚れてしまうのも仕方ないレベルやわ」
　実際、はやてですらフェイトを見ていると、たまに感心させられることがある。
　戦っているときのフェイトもたしかにそうだが、助けた相手に声をかけるときなどのフェイトの優しい笑顔には、思わず溜息の一つもつきそうになってしまう。
「うん、それは私もわかる気がするよ」
「せやろ？　私なんてあかんって」
「えー、はやてちゃんだってそんなことないよ。きっとすごくかっこいいと思うな」
「いやー、ないない、それはないって」
「本当だよ？」
　じ、とすずかに見つめられて、はやては口ごもってしまう。
「はやてちゃん、とってもかっこよくて可愛くて、私の方こそ憧れちゃうな」
「いや、そんな、私が可愛いとか」
　ありえへん、と言おうとして、すずかの真剣な眼差しに、はやては言葉を呑み込む。
「私だけじゃなくて、きっとみんなそう思ってるよ？」
「そ、それはほら、社交辞令というか」
「そんなの言わないよ」
　すずかに断言され、う、とはやてはたじろいだ。
　たしかに、アリサちゃんなんかがお世辞とか言ってるのって想像できんなあ、とはやては妙に納得してしまった。
　ただそれでも、自分が可愛いとかかっこいいとか、冗談で言うことはあっても本気でそんな風に考えたことははやてには一度も無かった。
　別にコンプレックスなどがあるわけではないが、ただなんとなく、可愛い自分、というのが想像できなかったのだ。
「じゃあ、証明しちゃおうかな」
　なおも困惑顔のはやてを見て、すずかが突然そんなことを言い出した。
「え？」
「はやてちゃん、今度の週末は予定あいてる？」
「う、うん、特になにもあらへんけど」
「じゃあ、どこかに遊びにいこうよ」
　ね、とすずかが笑う。そのあまりの急展開に、はやてはぽかん、と口をあけたまま固まってしまった。

「ね、どうかな？　もしはやてちゃんが嫌でなければだけど……」
「い、嫌なんて、そんなこと絶対あらへん！」
慌ててはやてが首を振る。
「すずかちゃんと遊びに行くのが嫌やなんて、そんなことしたらこの世に楽しいことなんて無くなってしまうで」
「そこまでかどうかはわからないけど、じゃあオッケーかな？」
「もちろんもちろん、オッケーもオッケー大オッケーや」
「よかった。じゃあ、週末に」
嬉しそうに、すずかが手を叩く。
「そ、それはええんやけど、遊びにってどこに行くん？」
「えーっと、そうだなあ」
すずかは少し考えるように腕を組んだあと、あ、とはやての方を振り向いた。
「はやてちゃんが決めてくれるかな？」
「え？」
「私は、はやてちゃんについていくから。デートのエスコート役は、はやてちゃんにお任せするね」
「で、デデデデートっ!?」
驚きのあまり思わず立ち上がってしまったはやてに、すずかが人差し指を唇にあてながらはやての服の裾を引いて座るように促す。
あ、とはやても慌てて椅子に腰を落とし、小さく咳払いをする。
つい大声を出してしまったが、ここは図書館、皆が静かに読書をする場所だった。二人がいるのは比較的奥のテーブル席ではあったが、それでも周囲の迷惑であることに変わりはない。
「ご、ごめんな、すずかちゃん」
小声で頭を下げるはやてに、すずかが微笑む。
「ううん、はやてちゃん、まさかあんなにびっくりすると思ってなかったから」
「だ、だって、デートて」
てっきり、他の友人たちにも声をかけるものだと思っていたはやてにとっては、すずかの言葉はまさに寝耳に水だった。
「だって、私がはやてちゃんがどれだけ可愛いか証明するためのお出かけだもの。やっぱり二人きりがいいなって」
ああ、とはやては溜息をついた。
突然、週末遊びに行こう、という話になったので話題が変わったのかと思っていたが、どうやらそういうわけではないらしい。
「でも、私とデートとか、その、え、ええんかな？」
「え？　私がよくてはやてちゃんがよければいいと思うよ？」

「い、いやその、アリサちゃんとかにな」
「アリサちゃん？　なんでアリサちゃんが出てくるの？」
不思議そうな顔で尋ねるすずかに、
「あーいや、なんでもあらへん。うん、そうやね。すずかちゃんとデート、楽しみや」
「私も。すごく久しぶりっていうか、はやてちゃんが学校にくるようになってからは初めてだよね」
「せやなあ。みんなと友達になってからは、二人で遊ぶことって無かったもんなあ」
「だよね。はやてちゃん。よろしくね」
「こちらこそや」
なんとなく頭を下げ合って、その姿がおかしくて二人ともつい吹き出してしまう。
しかし、すずかちゃんとデート……か。
そう思うと、やはりはやての心にはひっかかるものがあった。
さっきはついああ言ってしまったが、すずかと二人で出かけるとなれば、どうしてもアリサのことを考えずにはいられない。
すずかは気にしていないようだったが、このことは一応アリサにも話しておいたほうがいいだろうか。
結局、それから図書館の閉館まで、はやては読んでいる本の内容がほとんど頭に入ってこなかった。
すずかとのデート。
しかもどうやら自分が予定が決めなければいけないらしい。
遊ぶところや美味しいお店などの知識となると、はやてには全く自信が無かった。
アリサあたりに相談してみるべきだろうか。
アリサならそういう場所も、すずかが喜びそうなことも知っているだろう。
だが、そのためにはデートのことを話さなければならない。
本当に、話してしまっていいのだろうか。
すずかと別れたあと、そんなことを悶々と考えながら歩いているうちに、はやては気付くと自宅の前どころか、自分の部屋のベッドで突っ伏していた。
「え、あ、あれ？　私いつの間に!?」
時計をみると、どうやら家に着いてからまだ三十分程度しかたっていないようだったが、そもそもいつ家に帰ったのか、家族と挨拶の一つもしたのかすら記憶に無かった。
「あー……あかん、これじゃダメやな」
ふう、と一つ大きく深呼吸して、はやては脇の携帯に目をやった。
とにかく、こうなった以上、今一番考えるべきはすずかに楽しんでもらうことだろう。